



50th ANNIVERSARY TOHOKU INSTITUTE OF TECHNOLOGY

2014年、東北工業大学は創立50周年を迎えます

創造から統合へー仙台からの発進

東北工業大学

第29回定時総会・懇親会
2013年9月28日(土)・16:30～
仙台国際ホテルで開催!

Kodai

Jin!

1 ●ごあいさつ

同窓会会長

学 長

秋元 俊通

宮城 光信氏

5 ●特集／地域を志向した研究・教育・社会貢献

東北工業大学 新技術創造研究センター

佐藤 明

7 ●恩師からの便り

安全安心生活デザイン学科

環境情報工学科

舩岡 和夫氏

浅井 和弘氏

9 ●活躍する工大人

知能エレクトロニクス学科教員

太平電気(株)

シンフォニーケア(株)

(株)秋元技術コンサルティング

福島県中央住宅生活協同組合

千葉大学大学院融合科学研究科

東北工業大学学科事務職員

復興大学

仙台市工業高等学校

小野寺敏幸氏

前澤 博氏

井上 博文氏

阿部 和正氏

吉田 幸弘氏

大日方範昂氏

千葉 綾香氏

中野 優紀氏

西尾 正人氏

18 ●工大人同窓会・座談会

「創立50年! どうするこれからの工大」

25 ●支部活動等報告

●同窓会総会のご案内

●開学50周年記念式典開催のお知らせ

「工大人」17号の 発刊に当たって



東北工業大学同窓会 会長
秋元 俊通 (あきもと としみち)
1975年 土木工学科卒(5回生)
現在 株式会社 秋元技術コンサルタンツ 代表取締役

工大人17号の発刊に当たりご挨拶申し上げます。会員各位におかれましては、益々ご活躍のこととお慶び申し上げます。

昨年度は、既に立ち上がっております北海道支部、青森支部、新潟支部、北上支部(岩手県)の支援および岩手・福島県での同窓生の集い、並びに秋田県で同窓生の集いの準備会を開催いたしました。各地区で小さい火種から立ち上げて、会員各位のご参加をいただき、会員自らで大きな炎にしていきたいと存じます。同窓会はそのきっかけを作りたいと思っています。

さて、早いもので、東日本大震災から2年5ヶ月が経ちました。亡くなられた皆さまには衷心より哀悼の意を表しますとともに、被災された皆さまには心からのお見舞いを申し上げます。また、この間、復旧・復興に携わってこられた皆さま

および直接・間接に支援してこられました皆さまに、心よりの敬意を表します。

被災地は、ガレキの撤去の完了の目処が立ち、やっと復興に向けて具体的に動き出したというところです。やはり、現実には机上で考えたようにはならないものだ実感いたしました。この震災からの復興は、不幸な部分に目を隠れば、被災前の実体験を踏まえた新たな出発とも考えられます。二度と不幸が起きないように、また、単なる復旧ではなく、夢のある復興を果たしていただきたいものだと考えております。

東北工業大学としても、学生の支援はもとより、復興大学を立上げ大学を出て具体的な支援活動を開始いたしました。また、諸先生方もそれぞれの専門分野で貢献されておられますことに高い評価を受けておられます。

当同窓会としても、これまで

お亡くなりになられたまたは被災された会員に対してお見舞金を贈らせていただき、大学に対して復旧支援金を贈呈いたしました。今後は、大学とともに積極的に社会活動を行っている団体等への支援など外部支援を行っていききたいものと考えております。

東北工業大学も創立50周年を迎えます。当会々員も3万人を超え、各地各界でご活躍になっておられます。半世紀を

数える歴史と3万人を超える数は力です。今こそ私たちの新たなネットワークを構築して、東北工業大学を盛り上げるとともに、会員各位の活躍の場を広げ、活動の成果を高めようではありませんか。各位のご協力を切にお願いいたしますところでは。

最後に、大学及び会員各位の今後益々のご隆盛を祈念いたし、挨拶に代えさせていただきます。



2013年6月29日、オープンキャンパスの様子

ごあいさつ

東北工業大学の これからの50年に向けて



東北工業大学 学長

宮城 光信 (みやぎ みつひこ) 氏

1942年 北海道生まれ

1965年 東北大学工学部通信工学科卒業

同大学院修了後、東北大学電気通信研究所助手、助教授、工学部教授、同工学研究科長・工学部長、仙台高等学校長などを経て2013年4月から現職。

2013年4月1日より、東北工業大学の学長に就任いたしました。これまでの大部分の年月を教育・研究者として国立の東北大学で過ごし、その後、仙台電波高専、宮城高専、仙台高専で合計5年間、そして学校法人東北学院で学校経営に2年間携わってきました。高専では中学卒業生を、大学では高校卒業生、大学卒業生、大学院修了生という広範囲の生徒・学生の教育・指導に携わってきました。そのような経験を活かし、東北工業大学の発展のために微弱ながら全身全霊を尽くして頑張りたいと思っています。同窓生の皆様のご協力を切にお願いいたします。

私が現時点で理解している東北工業大学の課題は、かつてそうだったように、優秀な学生を確保し、東北の産業界に貢献する人材を社会に送り出していくことです。私自身が過ごした時代・環境と現在では大きく異なっています。それでもなお、震災で傷つき、人口減少が厳しくなっている東北地方にあって、地域の産業界に貢献するという本学の建学の

精神は益々現実感をもって受け入れられるものと思っています。東北工業大学が大きく発展するためにも、今の私の最大の関心事は、東北工業大学の実情を明らかに(情報公開)することであり、そして東北工業大学を如何に外にアピールしていくのか(情報発信)ということです。それと同時に、大学の教育・研究力を高め、ガバナンスを強固なものに確立していかなければなりません。しかしながら、後者については個人の私が案を提示しリードはできるものの、最終的には構成員の成し遂げようとする強い意志と協力がなければ実現するものではありません。

それでは東北工業大学の実情はどうでしょうか。時代は大きな変化の中にあり、情報通信技術が大きな発展を遂げている現在において、その恩恵を十分利用した合理的な意思決定システムの構築・大学運営を行っていかなければなりません。大学の主役である学生の教育、学生の人格形成のために、教員・職員が自らの任務を強く自覚すると同時に、その能力を発揮できるような教職

協働システムを構築していかなければなりません。開かれた大学として、大学の構成員である学生、教職員のみならず、社会に対しても大学の情報公開が十分行われることが必要です。閉じた世界の論理ではなく、公明正大で社会に開かれているということを前提にした論理展開が重要と思います。

東北工業大学はもうすぐ創立50周年を迎えます。これまで東北地方の産業界で活躍する多くの人材を生み出しました。その伝統を引き継ぐことがなほ一層重要なことと思いま

す。町づくりに貢献した先輩からの歴史は現在の大学に脈々と受け継がれています。文科省が大学は地(知)の拠点(COC, Center of Excellence)と言い出す前から、東北工業大学はその道を歩んできています。今こそ東北工業大学はしっかりと地に足を据え、建学の精神に沿って強い歩みをなすべきです。そのことが東北を強くし、東北で暮す人々の生活を豊かにしていくものと私は信じています。それが今後の50年に向けた東北工業大学の姿でもあります。



50th ANNIVERSARY TOHOKU INSTITUTE OF TECHNOLOGY

2014年、東北工業大学は創立50周年を迎えます。

創造から統合へー仙台からの発達

東北工業大学

地域を志向した 研究・教育・社会貢献



同協会副会長

佐藤 明 (さとう あきら)

東北工業大学新技術創造研究センター
1971年 工業意匠学科卒 (1回生)
宮城県職員、宮城県産業技術総合センター
所長を経て、現在、本学新技術創造研究セ
ンター事務長

COC (center of community) 事業

文部科学省が推進する「地(知)の拠点整備事業<大学COC事業>」では、大学は自治体と連携し全学的に地域を志向した教育・研究・地域貢献を推進し、課題解決に向けてさまざまな人材や情報・技術が集まる、地域コミュニティの中核的存在としての大学の機能強化を図ることを目標としている。

仙台のまちづくりに連携・協力

このような中で、本学と仙台市は、仙台市のまちづくりにおける相互の連携・協力に関した協定を、本年5月17日に締結した。

本学と仙台市が有するそれぞれの資源を積極的に活用し、相互に連携・協力して仙台のまちづくり活動を実施するもので、特に「動物公園駅」など地下鉄東西線沿線のまちづくりを主体にしたプロジェクト活動を予定している。

この事業を具体的に促進するため、せんだい地域の産業や文化等への貢献を目指した

「せんだい創生」プロジェクトを本年7月に学内に設置した。

地域の課題や要望と本学の研究資源等の効果的なマッチングを図り、「創生プロジェクト」チームを立ち上げ、テーマに応じた本学からの助言・提言、社会人と教員・学生との交流や協働活動により、産業創出・都市環境・人づくり・地域の情報や魅力づくり・資源の再構築・コミュニティーづくり等に寄与できればと考えている。

特に学生のプロジェクト参加は、まちづくりの実践的活動や社会との接点として「現場力」を高めることになり、地域志向の人材育成に反映できると期待される。

地域復興のための支援活動

本学は来年、創設50年を迎える。その間地域や産業界に対し、技術やデザイン等の研究資源等を活用し実践活動を行ってきた。

東日本大震災の被災地に対する復旧、復興に向けた本学独自の「地域復興のための共同プロジェクト支援」は、都市再生、産業振興、調査分析、

成23年度17テーマ、24年度は12テーマの支援活動を行った。

また、平成23年度文部科学省から承認された「復興大学」は、地域復興や地域活性化に貢献し、地域に貢献できる人材の育成を目的に開学され、本学が事業代表校として担っている。特に4事業のひとつである「地域復興支援ワンストップサービス事業(本学が担当校)」では産学官連携による企業の課題解決に向けた支援や、自治体との連携し持続可能な社会に向けた提言や実践を行っている。

このように、本学では全学挙げて地域や企業を対象とした復旧・復興に向けた支援活動を積極的に行っている。これは、これまで本学が培ってきた地域志向による研究と教育の結果といえるのではないだろうか。



地下鉄東西線まちづくり市民応援部キックオフセレモニーで本学今西肇教授による応援メッセージ

工大人に支えられ

安全安心生活デザイン学科

舩岡 和夫 (ますおか かずお) 氏

新潟県長岡市出身

元東北工業大学ライフデザイン学部 安全安心生活デザイン学科教授

元東北工業大学ライフデザイン学研究所 デザイン工学専攻主任

東北工業大学大学名誉教授

専門分野：建築史歴史意匠・地域のくらしと生産に関するデザイン



昨年3月で客員教員も退いて1年3ヶ月。いまだ、仙台市上杉5丁目の賃貸2DKにいます。

1979年に、福島県境山元町の海沿いの集落に、南隣の1895年築の古民家を移築・再生して30年余り。足を運んでくれた卒業生諸兄には断断的な姿しかお見せできませんでしたが、敷地の樹々も棟を超えるまでに成長してきました。内部もリフォームと若干の増築で私なりに納得できる姿に整い、内心誇らしく思うまでになっていた「リファブリ田の字1895」です。

ところが2011年3月11日の東日本大震災の大津波で、幸いにも妻は隣家に駆け込みトラックに乗せてもらい無事でしたが、家は「流出・大破」。しかし、家の方も1階はありませんが2階以上が屋敷林のお蔭で敷地内に遺りました。なんとか30年余の記憶を次につなげる手だてとして生かしたい、瓦礫にするには申し訳ないと思い続けて数か月。卒業生が積極的に賛同してくれ、片づけから保全のための養

生を昨年夏までにしてくれました。

あとは、移転先です。町の計画にはいまだのっけいませんですが、地域の方々と地域内の高台に集団移転を27人で要請中です。この計画には、安全安心生活デザイン学科の地域コースの先生方に協力要請をし、地区民のリーダーは建築学科卒業生が担ってくれています。

勿論、戻って山の尾根から海までの恵みを戴くには福島原発の放射線量やTPPが。家の再生には、消費税がたちはだかります。

時間がかかりますが再生の折は是非。

なお、今年度になって山元町に通っています。関係する町の課長も主任も工大人。生産的で、体調もまあまかに。



津波で流出・大破した自宅

"2776+α" との 出会い

環境情報工学科

浅井 和弘 (あさい かずひろ) 氏

元工学部通信工学科/工学研究科通信工学専攻 教授

元工学部環境情報工学科/工学研究科環境情報工学専攻、教授

元環境情報工学科、学科長

元環境情報工学専攻、専攻主任

元新技術創造研究センター、センター長

元大学評議員



私は、1984年4月、郵政省電波研究所(現、独立行政法人・情報通信研究機構)から本学に移り、通信工学科(現、情報通信工学科)と環境情報工学科を合わせて29年間の教員生活を終え本年3月に退職いたしました。

研究職を辞めて工大教員を選んだ訳は、大学が時代を生きる若者を育てる刺激的で緊張感のある場所だからです。

通信工学科では「電気回路」、「電子回路」、「高周波計測」などを、環境情報工学科では「コンピュータ・ネットワーク」、「リモートセンシング」を教えてきたので、在職期間29年では概ね90人/年×29年=2,610人の学部学生たちと出会ったことになります。それに硬式野球部部長を17年間していたので、平均8人/年×17年=136人の他学科学生たちとも出会えました。さらに研究室では、一緒にレーザ・リモートセンシングの研究をした大学院生が平均1.5名/年×20年=30名。以上、すべてを足し合わせると工大で2,776名の若者と巡り合えたことになります。今、この拙文

を読んでくれている卒業生諸君もその一人です。また君たちがいたからこそ、知的好奇心をくすぐる素晴らしい多くの同僚教職員たちにも出会えました。これが大学の良さなのです。でも授業中、「バカヤロ〜」と怒鳴ったこともありましたね。

この様な環境で29年間も過ごせた私は、卒業生の皆さんに感謝しなくてははいけません。

現在は、工大マークを付けた“全球バイオマス観測のための宇宙ステーション搭載レーザーセンサー(ライダー)”の実現に向けて航空宇宙開発研究機構(JAXA)の客員研究員として頑張っております。

この様に、まだまだ研究開発に携わることができるのも卒業生諸君から貰った若さのエキスの賜物でしょう、心から感謝しています。また新技術創造研究センター客員研究員として、県内の“先端的ものづくり中小企業”への支援活動も行っております。

卒業生の皆さん、何かありましたらご相談ください。

同窓生を育ててきた研究室を 引き継いで感じる事

東北工業大学 工学部
知能エレクトロニクス学科助教

小野寺 敏幸 (おのでら としゆき) 氏

1980年 11月1日生まれ

2007年 電子工学専攻 博士課程修了 (36回生・庄司研究室)



私の本学での生い立ちとこれから望むことについて、これまでの出来事を交えながら述べたいと思います。

私と恩師である庄司先生の研究室との出会いは学部3年生の夏から始まり、それから博士の学位を取得するまでの6年半を過ごしました。メーカーの研究所で経験を積んだのち、自分の育った場所に学生を育てる立場として復帰する機会に恵まれたのですが、退社直後に起きたのが東日本大震災でした。

本来の私の研究テーマは、庄司先生の恩師である故平舘先生とともに40年以上に亘り積み重ねてきた放射線のセンサーの開発でしたが、本学に着任して庄司先生とともに強い使命感を持ってすぐに始めたのが東電福島第一原発事故の放射能問題に対する測定支援と、市民への講演活動でした。

本来の研究成果ではなくとも、社会に必要とされているときに研究室の新しい存在価値を示すことで社会貢献



同窓生と開催した庄司先生の
退職記念パーティー (2013.6.29)

でき、平舘先生もお喜びくださったと思わずにはいられません。また、これほど長きに亘り研究室の歴史を築くことができたのは、研究室の発足にあたり平舘先生が提唱し庄司先生が継続してきた学生と教員の「和」の精神の結果に他ならないと思います。

私自身も教員となった今、身に浸透したその精神に導かれるように学生に接していることに気付くことがあります。この精神のもとで成長した学生は、いつまでも後輩を気遣い、先輩を敬う気持ちを忘れないでしょう。庄司先生が退職され研究室を引き継ぐにあたり、この言葉を胸にこれから50年、60年と続く研究室の歴史を同窓生と次世代を担う若者たちとともに築いていきたいと思います。

復興への決意 改めて知った経営理念

太平電気株式会社 代表取締役社長

前澤 博 (まえざわ ひろし) 氏

1950年 5月7日生まれ

1973年 電子学科卒業 (6回生・伊藤研究室)

1973年 太平電気株式会社入社

2010年 太平電気株式会社 代表取締役社長就任、現在に至る。



私は1973年(昭和48年)、電子工学科卒業の電通6回生です。卒業の年は“オイルショック”の影響で就職難の時代でしたが、太平電気へ入社し、以来40年の歳月が経ちました。

太平電気は昭和26年に創立し今年で62年を迎え、仙台市を始め東北地区、東京都に支社、営業所15箇所を網羅して、電気工事業を営んでおる会社です。社員数140余名、現在東北工業大学卒業者が26名勤務して活躍しております。

平成22年の震災の年に7代目社長に就任し、復旧・復興に無我夢中で取り組んでまいりました。通信網が遮断され、ガソリン等も何もかも不足する中、復旧工事に東奔西走し仕事が途切れる事がありませんでした。地元の建設産業として、復旧の一助を担えた事は有り難いことだと思っております。元々「建設産業」は地域の基幹産業です。「地域」を活かし地域の発展を支えるのは私たち地元企業としての重要な役割と自負しております。

震災後、確信したのは電気工事業は「人」がすべてであ

るという事でした。いろいろな物が足りない中で本当に足りないと感じたのが“人材”(人材)です。人材を育てていかないと、いざという時に役に立つことが出来ないことを知りました。

当社の社是には「地域社会の発展に寄与し、地域に役立ち、地域に喜んでもらえる会社を目指す」と謳っており、常に「報恩感謝」の気持ちでお客様を大切にと、考えております。

これからは、防災設備はもちろん、再生可能エネルギーの普及・拡大に貢献し、私たちの知恵をフルに活かす事こそが使命であると思っており、これこそが地域に貢献でき、ビジネスとして成立するものと確信しております。

東北工業大学の益々の発展と、同窓生の今後益々のご活躍を祈り、さらなるご指導をお願いしたいと思っております。



太平電気株式会社

高齢者が暮らし続ける建築と福祉の実践

シンフォニーケア株式会社 常務取締役

井上 博文 (いのうえ ひろふみ) 氏

1972年 7月21日生まれ

1997年 建築学科卒業 (28回生・志田研究室)

1999年 建築学専攻博士課程前期課程 建築学専攻修了

2001年 建築学専攻博士課程後期課程 建築学専攻単位取得退学



“認知症や障害を持っていますが、地域で住み続けることができる支援”をライフワークと考えたのは大学院時代のこと。それが契機となり、現在は福祉の会社を運営しています。建築学科で学んだ思考で高齢者を支援していますので、私にとっては福祉も建築も仕事だといえます。

大学入学前からホスピスに興味がありました。当時、末期のがん患者さんをサポートする施設がありましたが壁紙を白から暖色にただけに感じ、もっと患者さんらしい生活の場をつくらなければならないと思い、建築学科を専攻しました。建築家のガウディーや安藤忠雄に興味を持っていたことも要因です。

大学時代は、「ターミナルケアを考える会」や、宮城県にホスピスをつくる運動にも参加する一方、建築雑誌を購入しておもしろそうな建築を見て回りました。設計課題では先生にこてんぱんに指導されたこともたびたびでしたが、作品ができる喜びを感じたものでした。

4年生で志田研究室に入りました。このゼミが私の思考をつくりあげていることになり、

とても感謝しています。書籍の著者の思考を深く読み読することで、議論を深め知識も広げ、その思考が設計や論文の思考へと繋がっていくこと。大学院時代は研究室の一員として4年生の指導する中でのマネジメントを。また、建築サークル「colors」を立ち上げ、展覧会やワークショップを企画・運営することでマネジメント力、コミュニケーション力を学びました。

現在の仕事のきっかけは、修士論文「宅老所の存在とその建築的意義」の研究の中で多くの人々との出会いにあります。デイサービス+グループホーム「まりやの家」の設計や、全国の研究会で発表などをさせていただいたことです。

私はこれからも「地域」にこだわり、在宅生活の困難な状況を取り除き、高齢者が住み慣れた地域で暮らし続けることを支援したい。そんな建築と福祉の実践をしていきます。



シンフォニー将監外観

GISに出会って

株式会社秋元技術コンサルタンツ 常務取締役

阿部 和正 (あべ かずまさ) 氏

1975年 土木工学科卒 (5回生・舞石研究室)

国際航業株式会社入社

1977年 桐和測量設計株式会社

1991年～ 株式会社秋元技術コンサルタンツ

2007年～ 東北工業大学 非常勤講師



東日本太平洋沖地震から2年4か月が過ぎましたが、未だに行方不明の方が2000名を超えています。あらためて、行方不明者の方々の一日も早い発見と、お亡くなりになられた方々に対して謹んで哀悼の誠を捧げますとともに、被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。

私は、1975年3月東北工業大学の工学部土木工学科を5回生として卒業しました。卒業後大手コンサルタント会社に勤め、その後地元の建設コンサルタント会社にUターン就職し、現在に至っております。大学を卒業してすでに38年経過し、昨年還暦を迎えました。

この間主に、測量の分野に多く従事し、1994(平成6)年頃からは、GIS(地理情報システム)に携わっています。

GISは、平成7年に発生した阪神・淡路大震災を契機にその重要性が改めて認識されました。今回の東日本大震災発生でも私は、GISに携わっていることから各方面からの相談を受けることが出来ました。衛星画

像・航空写真から仙台平野津波被災地域の把握、その情報に基づき塩害被災の農地の復旧、GISにて管理していた農業施設情報により農地の復興が現在も行われています。大震災により東南東に約3.5mも移動した地殻の変動、位置情報が変わった仙台市都市基準点、詳細な数値情報地図の地殻変動変換作業、GISを利用した損壊家屋解体管理で業務の効率を上げるとともに、地理地盤的条件による損壊家屋箇所の把握をすることができました。昨今GISは、カーナビやインターネットの地図に利用され、誰でも触れることのできる身近なツールとなりました。

今後もGISを利用し、より分かりやすい情報発信を行い、少しでも社会に役立てられる空間情報づくりを行っていきます。



仙台市内損壊家屋解体箇所

「任せて安心」



福島県中央住宅生活協同組合 理事兼本店長

吉田 幸弘（よしだ ゆきひろ）氏

1976年 1月10日・福島県田村郡小野町生まれ

1998年 工業意匠学科卒（28回生・石川研究室）

現在 福島県中央住宅生活協同組合 理事兼本店長

工大を卒業してから早15年が経ちました。いつまでも大学時代の若い気持ちでいたいという思いとは裏腹に、結構年月が経ったなど実感いたしております。

私は今、「福島県中央住宅生活協同組合」という福島県内一円をエリアとした地場の住宅生活協に所属しております。その中で、本店長として組織の売上向上に向かって日々邁進しております。

我々は住宅メーカーではありません。日々、住宅展示場を運営する経費や広告宣伝費をいかに抑えるか、いかに購入し易い価格で良質な住宅をお客さまに提供できるか、どうしたら、たくさんある住宅会社の中から私どもを選んで頂けるかを基本方針とし、全職員活動しております。

住宅性能・意匠性の良さは当たり前という時代に、住宅生活協という『任せて安心』というブランドイメージが、徐々に福島県内のお客さまへ浸透しつつあります。最近では、「消費税増税」や「震災復興」などがあり、被災県民としては複雑な気持ちではありますが、業績は順調に推移しております。



工大在籍中は、「工業意匠学科・石川研究室」に所属しておりました。石川善美教授をはじめ、諸先生より多大なるご指導を頂きました。特に「住宅の熱環境性能」については、今の住環境に密に関連しており、また私の礎となっております。

課外活動では「準硬式野球部」に所属しており、当時監督の武者先生には大変お世話になりました。部への昇格が私の時代でしたので、今活動されている在校生の皆さまのご活躍がほんとうに嬉しく思います。本当は練習やリーグ戦も観に行きたいのですが(泣)

最後になりますが、在校生、同窓生の皆さまのご活躍、また工大の益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。

かけがえのない 6年間・・・



千葉大学大学院 融合科学研究科

大日方 範昂（おおひなた のりたか）氏

1988年 12月生まれ

2011年 工学部 環境情報工学科 卒業（7回生・浅井研究室）

2013年 工学研究科 環境工学専攻卒業（7回生・浅井研究室）

現在 千葉大学大学院 融合科学研究科

現在、千葉大学大学院に進学し、学位を取るべく日々研究に励んでいます。

私は入学当初から恩師である浅井和弘先生とは野球部の部長先生と部員という関係でしたが、学部3年生のときに先生の講義に魅せられ、リモートセンシングの世界に飛び込んでいき、そこから修士を修了するまでの3年間を10号館5階で過ごしました。それまで、小中・高・大学と野球中心の生活を送っていたため、自分の興味・関心がある学問は特になく、与えられたものを学習していく日々でした。そんな日々にもリモートセンシングは非常に魅力的で、今まで学習してきたものを総動員し、一つの問題を解決していくことの面白さを教えてくれました。私も、研究の面白さを多くの人に伝えたいと思い、現在の進路を選択し目標に向かって進んでいる段階です。

工大には学士・修士と6年間通わせていただきましたが、もう一つ掛け替えのないものに出会うことができました。それは仲間です。

硬式野球部に所属し、一つの目標に向かって部員全員で協力し、仙台六大学リーグでプレーしたことは、人生の大切な思い出の一つです。また、学部の方でも多くの仲間に恵まれ、充実した6年間でした。東日本大震災で卒業式はあげることができず残念でしたが、卒業後も定期的に連絡を取り合い、頑張っている姿を聞いて自分のモチベーションを保たせてもらっています。これからも工大で経験を活かし、社会に貢献できるような技術者・研究者を目指し日々精進していきます。

最後になりましたが、工大の学生皆さまと卒業生の皆さまのますますのご活躍を心からお祈り申し上げます。



感謝の気持ちを 忘れず

東北工業大学 学科事務職員

千葉 綾香（ちば あやか）氏

1989年 6月16日生まれ

2012年 クリエイティブデザイン学科卒業（1回生・篠原研究室）



昨年4月より、東北工業大学の学科事務職員として勤務しております。学科事務という職業柄、東北工業大学で働く教職員の皆さま、後輩でもある学生はもちろんのこと、非常勤講師としていらっしゃる工大出身の方々と接する機会が多く、日々刺激を受けております。在学中は同窓生の方とお会いする機会があまりなかったため、先輩方のお話を聞けるのはとても勉強になります。

そんな中、東北工業大学の多くの同窓生の皆さまが被災地の復興のために御尽力されていることを知りました。私自身も在学中に自宅が被災し、明日の生活もままならず、経済的な理由もあり、学業の継続も危ぶまれる状況でした。当時の私は、大学を卒業することはおろか、こうして母校で働くことができることは夢にも思っていませんでした。これもひとえに、ご支援をいただいた工大の先生方や職員の方々、復興に携わる同窓生の皆さまのお陰と深く感じております。この場をお借りして感謝

申し上げるとともに、たくさんの方々からのご支援のお陰で今の生活があること、そして感謝の気持ちをいつまでも忘れずに、これからも歩んでいきたいと思っております。ご支援をいただいた皆さまに恩返しをする意味でも、まだまだ未熟ではございますが、東北工業大学の職員として、本学の発展に貢献できるよう邁進してまいります。

最後になりますが、東北工業大学の益々の発展と同窓生の皆様のご活躍を心からお祈り申し上げます。



勤務する長町キャンパスでは、ライフデザイン学部の学生が学んでいます

支えあえるデザイン を目指して

復興大学地域復興支援ワンストップサービス

中野 優紀（なかの ゆき）氏

1989年 4月宮城県登米市生まれ

2012年 安全安心生活デザイン学科卒（伊藤研究室）



私は今、復興大学地域復興支援ワンストップサービスで運営事務をしています。ワンストップサービスは、被災地域の企業や自治体・団体の課題解決に向け大学の教員と支援機関とマッチングを行っています。復興支援をする方々の近くで仕事をしているうちに、以前から持っていた「人の役に立つことがしたい」という気持ちが強くなりました。

大学での卒業研究は【高齢者とのコミュニケーション】をテーマに、実際の介護保険施設で高齢者の方と触れ合いながら研究をしました。介護施設と言えば、家族と離れ孤独な高齢者が生活を送る場という暗いイメージを持っていましたが、そのイメージとは反対に高齢者の方は皆いきいきと充実した生活を送っていました。

介護士の方と触れ合う機会が多くなると、介護士の方は高齢者が楽しく充実した生活を送れるようにという思いを持ちながら、自分たちも楽しんで仕事をしていること

に気づかされました。介護士の方が明るく生き生きと接することで高齢者の方も生き生きとしていられるのだと感じています。このことはまさしく、支えている人の環境を良くしていく事こそ、支えられる人のためになるのだと感じており、支え合えるデザインと捉えています。

今、復興大学では工大とともに石巻市雄勝地域の再生支援を行っています。私も微力ながらそのお手伝いをしています。卒業研究で感じた思いを雄勝地域の復興支援でも生かしていけるように、復興のために尽力している先生や復興大学の皆さんが雄勝のために十分に力を発揮できるよう縁の下で力を持ちとなり、復興のために役に立てるように頑張りたいです。



雄勝市商品

行動するのは、 今でしょう！

仙台市工業高等学校 校長

西尾 正人（にしお まさと）氏

1981年 建築学科小野瀬研究室卒
仙台工業高校教員、古川工業高校教員を経て白石工業
高校教頭、石巻工業高校教頭、米谷工業高校校長を歴
任。本年4月より仙台市工業高校校長



工大の建築学科を卒業して、
高校の教員として過ごしてきました。

工業高校はもの作りの人材
を育成する場所ですから、社
会に出て役立つ人材を育てな
ければいけません。古川に赴
任していた頃は、地域の中で
実務と連携したプログラムを
実施して、建築科の生徒が地
域のプロの方と連携し木造住
宅の耐震診断や実際の建物の
設計を提案するというも行
いました。これは、地域から高
く評価いただき数棟の建物を
設計させていただきました。そ
の後、米谷工業高校でも独居
老人宅の電気スイッチの交換・
清掃などの専門性を生かした
地域連携を企画および実施
をしてきました。

今、高校と大学の連携が盛
んに行われていますが、実際
に役立つプログラムに発展し
ていくことが必要です。社会
に役立つという自信を持って
巣立ってほしいと願っています。
そのためには生徒たちに小
さな成功体験が必要で、その
積み重ねが自信と誇りにつ
ながっていく訳です。それ
には行動することが必要に
なります。行動を起こす
ということとは、“今” やらな

いといつまで経っても動
けません。若いときの行動
力は、重要な経験になりま
すから、まず行動というぐ
らいの感覚でいろいろなこ
とにチャレンジしてもら
いたいと思います。

私は若い頃に、夏休みに1
ヶ月ほどかけてヨーロッパ
各国を回ったことがあります。
ツアーではなく、バックパ
ックで。いくつかの国を回
りましたが楽しいというよ
り不安でしたね。おっかな
かたつたですよ。英語も出
来ない中で、泊まる宿も決
めないで行きましたから。そ
れでも何とか行きます。そ
の環境の中に置かれると出
来るものです。この時の行
動力が今も生きています。
また、あのような行動力は
、若いときだったから出来
たようにも感じます。ぜひ、
今の若い人たちにも、今だ
から出来ることにチャレン
ジしてもらいたいものです。

工大も創立して50年とい
うことで、それだけの歴史
を重ねてきていますから、
社会の中でも良い手本を持
っている先輩が数多くいら
っしゃいます。これら先輩
のネットワークが出来てい
ますので、その伝統を上手
く使って果敢に行動して欲
しいと思います。

創立50年！ どうするこれからの工大

【出席者】

宮城 光信氏（東北工業大学 学長）
榎本 幹氏（元東北工業大学電子工学科教授、電子、昭和43年卒）
谷津 憲司氏（東北工業大学建築学科教授、建築、昭和45年卒）
千田 隆志氏（千田建設社長、土木、昭和48年卒）

【進行】

佐藤 明氏
（東北工業大学新技術創造研究センター事務長、工業意匠学科、昭和46年卒）

学長：今日は皆さんの貴重な
お話がうかがえること、
感謝申し上げます。大学法
人としても、学内のいろい
ろなところからご意見を
集めておりますので、皆さ
まのご意見には大いに期待
しております。

ありがとうございます。

それでは、まず自己紹介
をそれぞれしていただき、
皆さんが学生だったときの
工大はどうだったか。それ
から、これからの工大に期
待したいこと、同窓会とし
ての役割について、さらに
今の学生にメッセージをお
願ひいたします。

まずは自己紹介からお
願ひします。

してきました。工大では70
歳まで現役で教えてしま
したが、学生時代から含め
て47～48年ほどを工大と
関わってきました。

谷津：私は建築学科の1回
生で、今は工大で教えてい
ます。大学卒業後1年半ぐ
らい東京の設計事務所で
仕事をしていましたが、恩
師の山田先生から、助手に
とのお誘いがあり工大へ戻
ってきました。それから40
数年お世話になり今年定
年を迎えました。大学で講
義をしながら、各地の自治
体と関わり、設計の仕事や
コンペやプロポーザルの審
査をさせていただいていま
す。

千田：私は土木工学科の3
回生で昭和48年卒業です。
今は、家業の建設会社
の社長をしています。

高校は静岡だったのだ
ですが、祖父が仙台で建設
業をやっていた縁で工大に
入学しました。在籍は舞石
研究室でしたが、先生には
厳しくも暖かくご指導いた
だきました。

榎本：工大の1回生で、昭
和43年に

電子工学科
を卒業し、そ
の後東北大
学の稲場先
生のところで
の修行を経
て、山形大学の大学院へ
進み、工大へ教員として戻



榎本氏

列島改造論など、建設会社の華やかな時代に卒業させていただき、就職の内定も数社いただいた記憶もあります。今では考え



千田氏

られない就職状況ですね。卒業後は道路会社に就職し、その後家業を継ぐために戻ってきたという経緯です。

県内には、同業者に工大OBが多くいらっしゃいますので心強く感じています。

ありがとうございます。

先日、同窓会の集まりで青森、秋田へ伺ってきましたが、建築、土木系の方が多く集まってくださるのですね。その意味では、建築、土木の方々のネットワークは素晴らしいと感じました。人のつながりは、学生時代だけではなく仕事をする上でも大切なのだなあと実感しました。

では、学生の頃の良かった思い出などお聞かせください。

榎本：私が工大で影響を受けた先生は4人いらっしゃいます。

お一人は吉田賢抗先生です。吉田先生からは仙台に東北工業大学が開学すること聞き、入学のお誘いを受けました。

私の入学時は、この場所

に1号館の古い建物があっただけで、電子工学科と通信工学科を合わせておよそ100人規模で、こじんまりとした大学でした。

当時は遠足があり、鬼首に行ったことが思い出です。バス2台に学生と教職員全員が乗れるほどでしたね。

入学後、体育の伊藤孝夫先生が工大に赴任され、学生生活全般で大変お世話になりました。

卒業する時期に東北大学の大学院を受験したのですが滑りまして、その時にお声をかけていただくなど、稲場文男先生にもお世話になりました。

もうお一方は、工大の理事長をしておられます岩崎先生です。

良い先生との出会いが、学生としてはエポックメイキングになると思っていますが、当時は、学生も少なく先生とコンタクトが取りやすかった。また、設立初期の大学に入学したことで、歴史のある大学ではやれないことが出来たのではないかと思います。

谷津：1回生の頃は初めて教壇に立つ先生が多かったようで、学生としても心もとない感じはありました。しかし、学生と先生の距離は近く、一緒に工大をつくり上げてきたという思いがあります。

入学当時の工大は何もない状態でした。造形の

授業では、小田先生だったと思いますが、最初の授業で「道具を作れ」と指示されたのです。しかし何を作るための道具かわからないのです。そこから考えなければいけませんでしたので、鍛えられました。

自分たちで考えながら、わからないことは先生に聞きに行く。そうすると、先生と学生の距離も近くなってきます。当時は、先生も学生のアパートへ、よくやってきて一緒に飯を食ったりする。学生も気楽に受け入れて講義とは別に、自然に込み入った話もしますし、一緒に遊びに行くようなこともある。

今の学生は、すべて先生に教われるということで、型にはまっているようで物足りない気もしますね。

確かに、当時の先生は頼りない感じはしました。自分たちで勝手にやっていたように思います。ただ、小田先生の彫刻作品はいろいろな場所に置かれており、今も仙台高専広瀬校の中庭にもありますね。

千田：入学して最初のガイダンスで、成績が60点以上でないと単位は認定されないという話があり驚きました。高校とは違いずいぶん

厳しいなと思ったことを覚えています。単位は全部取得しようと決意しましたが、その中には4年掛かって取得した単位もありました。

卒業研修は舞石先生の測量研究室でしたが、いつも先生は4号館の研究室にいて、そこに行けばいろいろと相談に乗っていただきました。

卒業研修に行き詰まったときも、具体的にアドバイスを受けて、卒業発表まで丁寧に面倒を見ていただいたこと、また、就職・人生等すべてのことに、先生と対話しながら学生生活を送れたことは、良い思い出になっておちます。

当時の工大では、1年生から専門科目の授業がありました。いわゆる工大の特長である「くさび型」教育で、市内の鶴ヶ谷団地で施工実習をしました。普通高校出身の私は、測量も土木用語も何もわからない中、実習担当の仙台市職員の方に丁寧に教えていただき、「土木」を知る良い経験になりました。

あらためて学生へのメッセージがありましたらお願いします。

榎本：私の学生のときは卒業までに169単位が必要だったので、年間40単位を4年間取らないといけませんでした。今は124単位なので3年で取得できます。こ

れではいかがなものか、今の学生はあまり自由度がありすぎてダメになっていないかと心配します。

学生時代、倫理学の吉田先生に、「君らは東北大学生には学力では劣るだろう。しかし、工大を出た学生は良い人間だといわれるようになって卒業しなさい。」と言われたことが印象強く、今でも講演などでもその話をします。

岩崎理事長が学長時代に「就職率100%を目指しましょう」と提案しました。工学は社会に役立つ必要がある。役立つということは社会からの評価として良い就職があると考えたのです。それからは、大学として就職に対する意気込みが違ってきました。

ただ、学生は恵まれすぎていたかもしれません。挫折がないので、逃げていく気配も見えます。這い上がってくる気概が欲しいのですが、難しいですね。

谷津：128単位は、やる気になれば2年で取得できる内容です。今、3年から就職活動が始まるので実質2年

しか勉強する時間はなく、何のために学んでいるのかわからない。試験は、ある一定のことを記憶してそれを試されているにしかすぎません、人にやらされている感があり、自分のために考えることをどこかで教えなければいけません。考え方のおいこですね。自分の目標とか、夢が何なのかを考えられるようになると、就職への意識もしっかりできるようになる。

教える側は大変ですが、暗記が重要ではなく、記憶の組み合わせを理解できること、自分で考えていくことが大事になります。また、先生は教えすぎではないと思いますね。自分で考えることの面白さを気づかせる教育をしていくことが必要です。学生と親密な関係をつくることは難しいですがね。こうすると先生の負担が増えるのですが、学内の教育システムやインターネットを活用してうまくやっていくことを考えていかなければいけないではないでしょうか。

教えすぎないということとは、難しいですね。

谷津：たくさん教えても記憶に残るのはほんのわずかですから、数を減らして、本当に必要なことだけ教え

ばいいんです。

千田：当社の社員をみていると、コミュニケーションの取り方も、直接の会話よりメールを送ってそのまま終わりになっているような部分もあります。

また、“仕事の仕方は盗め”という教えもあります。直接教えられるとできないようになってきているかもしれません。自主性を育てる難しさを実感しています。

大学とは、ものの考え方を学ぶ所と言われたこともあります。先生方との会話や先輩との関係でそれが出来たのではないかと思います。先生や先輩、後輩との関係でコミュニケーションが良くなり、人付き合いを学ぶことが出来たのではないのでしょうか。

谷津：“作法”というものがありますね。作法は型ですが、型を覚えないとそこからの発展がありません。携帯やメールでも作法がある。

まず、型をしっかり覚えてもらう。教育の中で、そうしたことも教えていかなければいけない。つまりいかに必要なことです。

榎本：それと同じことですが、電話のかけた方がわからない学生がいました。初めての人に、電話でどう話したら良いのかわからないので電話をかけることができ

ないということでした。

学生のレポートも、インターネットの文章をそのまま写してくる。文章のエッセンスや要点は何かをしっかり捉えることができない。就職のために履歴書も書けないのですから。

自分の考え方をどう文章に表現するか、指導していたことがあります。指導すると、教えられたことをそのまま書いてきますので、自分の考えをどう入れるかをまた指導していきました。

模擬面接をやったときに、同じことを経験したことがあります。



佐藤明氏

谷津：何回か繰り返すとうまくなるものです。

今、工大は環境エネルギー学科や都市マネジメント学科、ライフデザイン学部などが設置され、昔とはだいぶ変わってきています。就職率はけっこう良いのですが入学者が少ないなど、大学間の競争も厳しくなっています。そんな中、文部科学省の指導もあって、大学が地域の中で社会貢献をしっかりと考えていくところといます。

これからの工大に期待したいこと、工大への提案、同窓会の役割についてお願



います。

学長：私立大学の46%が定員割れになっています。また、途中で辞めていく学生も多いのです。先日ある学生と1対1で話す機会がありました。その中で、学生は先生ともっと話がしたいという意見も出てきました。

それから、工大の良さがなかなか外部に伝っていない状況です。この対策としては、高校への出前授業など積極的に外に出て行く活動をしているところです。これからは小中学校への出前授業も必要でしょう。

榎本：教育する側がどこまで我慢できるのか。教員が学生に近づいていかないといいません。そうして、どのようにして勉強する気にさせるかが鍵だと思います。

谷津：学生は勉強してわからないとダメなのでしょう。私はわからなくても良くて、自分で判断する力を持ち、自信を持つことが大切なのではないかと思っています。文科省は“教育の見える化”というのを盛んに言っていますが、学生が見える形で、達成感を得ることをサポートすることが必要だと思います。



宮城学長

建築学科では大学で学生が覚えるべき1000の専門用語集をつくっています。これだけは覚えなさいと分かりやすく示す。これができると、自分は今どこに向かっているのか目標がはっきりし、学生は大学でやることのイメージが持てます。

千田：「学校法人 東北工業大学50周年史」の中で読んだ“文理融合”ということから、先生方はだいぶ苦労してきているんだと知りました。

工大はどこまでも学生を大切に作る校風があります。これがすごく良いことではないでしょうか。

私の尊敬する方の言葉に、「学生のための大学であり、大学は大学に入れない人のためにある」と。この考えがあれば、大学は発展すると思います。

もう一つは、一番町ロビーをもう少し活用することを考えてほしい。月に1度は“工大の日”を設けて、OBも気軽に訪れることができるようにしてほしい。

それから、もう一度大学



で学びたいという社会人はどう受け入れるか。女性をどう受け入れるかも課題でしょう。この課題に向かって考えていくことは大切なのではないのでしょうか。

榎本：同窓会会報の工大人などを宣伝物としてうまく使い、もう少し配布してはどうでしょうか。就職データなどは学生確保の大切な情報になるので、目に触れる機会は多い方が良いでしょう。また、大学教員は高校を含めて中学校まで行っても良いのではないのでしょうか。宣伝のタイミングや対象を考慮して効率よくしたほうが良いと思います。

谷津：建築プロフェッショナル論のような講義を考えていつてはどうでしょうか、社会で活躍している工大OBと一緒にになって工大を創っていくことができると思います。創立50周年は非常に良い機会です。これを機会にOBが参加できる仕掛けを作るのはどうでしょう。同窓会にはこれに一役買ってほしい。OBの知恵をもつと活用したい。



学長：東北学院では、毎月15日の昼食時に「TG15日会」という会合がホテルであって、講演などもやっていますから、同窓生等はたくさん集まります。

谷津：そういったことを続けることで大学への親密性が深まる。どのような仕掛けをするか。定年を迎えた工大500人に100字、寄稿してもらうということで、記事や冊子をつくるといいのも良いですね。人と人の関係性が大切ですから、それを創り出すということです。

今日の話では、昔は先生と学生の距離が近く何でも話が出来たとか、いつでも先生に相談できたとか昔とは違うかもしれませんが、一番町ロビーで横断的にそのような関係性を創ることができると良いですね。

とても良いお話をたくさんいただき、ご意見や提案が満載になりました。ここで出た話題はこのまま終わらせるにはもったいない内容がたくさんありました。

今後とも何かとお世話になるかと思っていますので、よろしくお願いします。

本日はありがとうございました。

(2013年7月14日・東北工業大学八木山キャンパス1号館の会議室にて)

【北海道支部】 寂しい北海道出身者の減少

北海道支部幹事
奥塚 恒一（おくづか こういち）氏
1980年 土木工学科卒（10回生）

東北工業大学創立50周年、おめでとうございます。そして、この半世紀の間に、1978年と2011年と2度の大きな地震にみまわれた中で、記念すべき年を迎えられたのも、大学関係者はもとより同窓生の皆様の人力の賜物と思っています。

私自身も1978年の宮城県沖地震を大学3年生の時に体験し、当時の被災状況を見ると工大の底力を感じています。なお、八木山キャンパス5号館の耐震補強写真を見せると、一様に驚きの声があります。更に、見た目は良くはないですが、一昨年の東日本大震災時に被害が無かったと説明すると、驚嘆の声が上がります。

ただ、バブル経済崩壊後に地元志向が強まったため、北海道出身者の入学者が極少数になっている本学の現状には、一抹の寂しさを感じています。

支部の活動ですが、同窓生が北海道全域に在住しているため、なかなか全体としての行動ができません。課題が残ります。現在、札幌



北海道支部メンバー

地区では年に2回15人程が集まっているので、これを徐々に拡大していければと考えています。また札幌以外では、学科単位での活動も行われている地区もあるので、これを全学科に広げていければと思っています。そして、北海道工業大学との定期戦も絶好の機会ですので、支部としての活動が出来ればと考えています。

支部としては新卒者が見込めない状況で、平均年齢が上昇の一途をたどりますが、何とか活動を盛り上げていければと思っています。これまで支部活動に参加されてこられなかった同窓生の参加を期待しています。

最後に、東北工業大学が益々繁栄していけますよう、支部としても微力ながら協力していきます。

【青森県支部】 新幹線函館開通にむけて

青森県支部事務局
向井 務（むかい つとむ）氏
1982年 土木工学科卒（12回生）

東北工業大学同窓会青森県支部は昨年2013年の6月に、沢田康次前学長の基調講演をはじめ、3名のパネリストを迎えシンポジウムを行い、また同窓会も盛大かつ和やかに終えることが出来ました。今年は隔年開催の谷間の年に当たり、表立った活動は昨年に比べ、少ない状況となっておりますが、同窓会会員は元気にしている次第であります。

さて、2010年12月4日に東北新幹線 新青森駅までの全線開業後、3年の歳月が経ちました、また今年の3月からは東京～新青森間の所要時間が最短で2時間59分と3時間をきるまでになりました。我等が母校である東北工業大学のある仙台までは、はやぶさに乗車すれば1時間41分で到着することが出来ます。（余談ですが青森市～まぐろで有名な大間町までは、車で3時間。）

青森県民にとってはアクセス状況の整備拡充、移動時間の短縮等により、便利になってきているのが肌で感じていると思います。それに対して新青森駅前

の開発は目に見えるものではなく、個人的には観光、出張でこられるお客様に大変申し訳なく思っています。

2015年度末（平成27年度末）までには新青森～新函館の北海道新幹線の開業予定、それに伴い青森県内で唯一北海道新幹線駅となる、今別町の新駅開業も控えてきました。現状の維持ではなく、青森県の魅力をさらに県外に発信できるように期待している次第です。



東北新幹線新青森駅から市内を望む

岩手県同窓生の集い

今年で4回目となりました「岩手県同窓生の集い」が、2013年6月15日(土)に盛岡市のホテルニューカーリーナにて開催されました。

開会の挨拶で、大学が設立50周年を迎えることについて秋元俊通 同窓会長、ご来賓の挨拶では、在学生支援の同窓会との連携について山田孝夫 東北工業大学後援会岩手県支部役員のお話がありました。続いて、佐藤明 同窓会副会長のご発声による乾杯の後、名刺交換など盛んに交流が行われました。参加者によるスピーチでは、「今

回、初めて参加しました。来年もぜひ参加したい。」「同じ会社の後輩と3名で参加しました。来年は、今年より多くの後輩を連れて参加したい。」、また、それぞれの近況報告などがあり有意義な交流の場となりました。最後に、岩手大学地域防災センター特任助教として活躍されております菊池義弘氏(平成21年3月大学院工学研究科建築学専攻の博士(後期)課程修了)の中締めにより閉会い

たしました。

特に今年度につきましては、例年、多数参加いただいております北上地区の皆さまが地元のイベントのため参加できないということもあり、当初、開催が危ぶまれました。しかしながら、新たな参加者が増えたことにより、集いを無事終了することができました。ご参加いただきました皆さまに厚くお礼申し上げますとともに、次年度もご参加、ぜひご友人をお連れしてご参加いただきますようお願い申し上げます。(同窓会事務局)



【新潟県支部】 人生色々

新潟県支部
動山 憲一(どうやま けんいち)氏
1976年 土木工学科卒
現在 長岡みのり幼稚園勤務

東日本大震災で亡くなられた方々へのご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災された方々に心よりお見舞いを申し上げます。

悪夢の3.11から2年、世間の話題は、原発、政治と、なんとなく本来の地震の話題が遠のいているように感じられるのは私だけでしょうか。あれから数回、宮城県(仙台)、福島県を訪れた際に感じたことは、復興が進みつつあるのは仙台市内だけのように思われ、津波の被災地は荒れ果てたまま、まして放射線被災地は除染の目途が立たない状況のようである。母校の所在地の仙台を第二の故郷と考えている私にとって、3.11は、決して忘れることのできない、忘れてはいけない事として認識している昨今です。

さて、私とえば、2013年6月に新潟支部会長就任いたしました。よろしく願いたします。

ところで、還暦を迎える年になんという縁なのでしょう。57年ほど前に卒園したこの園の園長への就任要請があり、喜んでお引き受けをさせて頂きました。今まで、長い間、

築いていた生活感、人間関係等とは無縁な世界である。人生色々である。

就任して3ヶ月が過ぎ、園内のあちこちで響き渡る歓声、泣き声を聞き、この声は、喜び、悲しみであり、自然に湧き上がってくるそのままの声なんだと改めて気づきました。

でも、私が今まで生活してきた社会では、このような声を価値がないものとして扱っていたようです。この無垢な園児たちの人生の入り口を預かる先達として、ソフトに巣立てるよう既成概念を捨て、グローバルな視点で見守り、成長を楽しみつつ、色々な、世界観、人生観の見極めを余生の課題として、過ごしたい。



動山氏

【秋田県】 準備中

出雲 幸一（いずも こういち）氏
1982年 土木工学科卒
現在 山岡工業株式会社勤務

工大を卒業して秋田へ戻って32年、長男は就職し、次男は再来年に大学受験ができる年となりました。ここ数年、仙台へは年間で5～6回行き来しますが、以前の仙台支店勤務していた時代とは違って、見るたびに変貌していく校舎、キャンパスそして学生たちには年月の流れを感じさせられます。

今、秋田では支部としての活動は行われておりません。以前に40名程が集まって「同窓生の集い」を2回開催したことはありますが、気づいてみるとそれから思い出せないくらいの年月が経っていました。

そんな中で、私が広報誌「工大人」への執筆をすることになった経緯は、父母懇談会出席のために秋田へ訪れた秋元同窓会会長をはじめ、教授、事務局の方々の皆さんとお会いしたことでした。その中に在学中にお世話になった研究室助手の先生（現在は教授）と、親しかった一歳下の後輩

（現在長町キャンパス事務長）がいました。その時は、32年振りでしたので信じられない気持ちと懐かしい思いが交錯してしまいました。当時を振り返りながらいろいろなエピソードに触れ、話しが尽きることはなく、地元からも、後援会と諸先輩の皆さんが参加し、親睦を深め、とても賑やかな中で閉じた会となりました。

その時は、偶然に声を掛けられ楽しいひと時を過ごさせていただきましたし、「工大人」への執筆も何かの縁ですので、これからは秋田県内の卒業生の皆さんの動向を把握しながら、3回目の同窓生の集いへ向け準備したいと考えております。



出雲 幸一氏

第2回 福島県同窓生の集い

福島県支部
市川 良一（いちかわ りょういち）氏
1978年 土木工学科卒（8回生・江成研究室）
現在 株式会社市川建設 代表取締役

2013年6月8日（土）郡山市内のホテルにて、第2回同窓会が開催されました。

まだ支部長など役員は決まっていますが、本部同窓会事務局の方々の努力で昨年第1回同窓会に続いての開催となりました。特に第1回は、秋元会長、今回は西條副会長とお忙しい中、御出席頂き東北工業大学“愛”を深く感じる所です。感謝を申し上げます。

他の学部の方々とは、始めての集まりでしたが土木工学科（現在は環境情報工学科“時の流れを感じます”）は、1984年から同窓会活動をしていましたが、色々な社会情勢の中、尻つぼみになっていました。久々に同窓生の方々とお会いをして楽しく酒を酌み交わしました。

人として生きてきて東北工業大学の学会で時間の共有をただで友と呼べる幸福を感じる時となりました。大学同窓会事務局、役員の方々に改めて感謝を申し上げます。又、ここで御

紹介をしておきたいのですが、昨年の第1回同窓会においては閉会前に土木工学科2代目支部長、阿部悦雄先輩（2回生）の応援団指揮による東北工業大学校歌を合唱して『工大人』の誇りを胸に閉会を致しました。

引き続き次の開催を心待ち致します。



福島県内の同窓生の方々

東北工業大学同窓会 第 29 回定時総会のご案内

開催日時：平成25年9月28日（土）

定時総会(桜の間)/16:30～17:30

懇親会(広瀬の間)/17:30～19:30

議 題： ① 平成 24 年度事業報告 ② 平成 24 年度決算報告
③ 平成 24 年度監査報告 ④ 平成 25 年度事業計画
⑤ 平成 25 年度予算案 ⑥ その他

会 場：仙台国際ホテル

仙台市青葉区中央 4-6-1 ☎ 022-268-1111（代）

懇親会参加費：3,000 円

※参加費は当日会場にて徴収いたします。

懇親会には多くの先生方もお臨席されます。同級生、研究室やクラブの同窓生等、お誘い合わせの上ご参加ください。

卒業された皆様へ

東北工業大学同窓会 会費未納の方へ

同窓会会費は会員間のネットワーク化事業、在学生への支援、支部活動の推進、本学および本学後援会との共同事業等を進めるために有効に活用しています。同窓会会費未納の方は、別紙郵便振替通知書で、早急に納入いただきますようお願い申し上げます。

●終身会費 20,000 円

(5,000 円 × 4 回・10,000 円 × 2 回の分割納入方法もございます)

●郵便振替口座

02280-5-22263 東北工業大学同窓会

※すでに納入済の会員には、郵便振替通知書は同封しておりません。

本会運営の趣旨をご理解の上、この通知をご容赦ください。

開学 50 周年記念式典開催のお知らせと 教育振興助成基金募集のお願い

1964 年 4 月 1 日、本学開学。

あれから半世紀が経ち、本学は 2014 年をもって開学 50 周年を迎えます。本学の同窓生は 3 万 1 千余名が各地各界で活躍しています。また本学は、真の地域貢献を実現するために仙台市とまちづくりに関する協定も締結するなど多くの地域に関わっており、東北地方の明るい未来をめざして、「仙台から、新たな 50 年へ発進」するところです。

つきましては、2014 年 6 月 21 日（土）・仙台国際ホテルにおいて記念式典を行い、本学キャンパスの見学会、祝賀会、宮城県出身の著名な企業人による講演会も予定しています。

また、創立 50 周年記念事業として教育振興助成基金増額への寄付の申込を受付けております。

http://www.tohtech.ac.jp/corporation/reconstruction_aid/index.html

同窓生の皆さまには改めてご案内いたしますが、何卒、格別のご理解とお力添えを賜りたくお願い申し上げます。

発 行：東北工業大学同窓会

事務局：東北工業大学キャリアサポート課内 〒 982-8577 仙台市太白区八木山香澄町 35-1

TEL.022-305-3336 FAX.022-305-3337

URL.<http://www2.odn.ne.jp/~aan98460/>